

多木浩二, 「メディアの興亡」, 『写真論集成』岩波文庫, 2005. 325-379.

「メディアの発端——十九世紀の写真の伝播」(『写真装置』1982年11月、1983年10月)  
・ダゲレオタイプの伝搬に見える、19世紀の情報空間とそこで一定の役割を果たした新聞の存在。事実、ダゲレオタイプはその発表以前に西欧全体にすでに知られていた。が、そこでのグローバルな規模での情報の伝達はほとんど地理的条件とぴったりと重なっていたと言える。

・フランスの歴史記念委員会は発表のおよそ二か月後に関心を素早く示した。が、実践的に写真を扱うのは金属板から紙へと支持体が移行されるカロタイプの導入以降である。

・カロタイプの再評価

・1850年代に、フランスのブランカール・エヴラールによる写真出版業のひな型的実践。

・歴史委員会による写真記録事業(ミッション・エリオグラフィック)は、写真による記録や歴史家の第一陣。エドゥアール・ドニ・バルデュ、イリボット・バイヤール、アンリ・ル・セック、ギュスターヴ・ル・グレイ、O・メストラル。

・シャルル・ネーグル、シャルル・マルヴィルらも同時期に個別に活動。

・ネーグルらの疑似スナップ写真も、注目に値するという。

・「十九世紀の写真はどんな媒介によって大衆の手元にたっしていたのだろうか。最も大きな写真体験は肖像写真を撮ってもらうことだったが、その場合、人々は、写真から直接、写真を受取った。写真館は立ち並び、その上、全くいかがわしい街頭写真家もうろついていた。だがそれは自分自身の肖像で、写真を介して広く世界を知る経験ではなかった。カロタイプの時代には写真集が続々発行されたが、その部数はおおむね数百歩どまりであった。とうてい大衆がそれを手にしたとは思えない。新聞や雑誌はどうか。まだ網版印刷が生まれていなかったから、写真をもとに版画を起こさなければ、文字と共刷りすることは不可能であった。

十九世紀に写真が大量に社会に流通する現象を探っていくと、媒体として書籍や新聞よりも「ステレオスコープ」、「カルト・ド・ヴィジット」、「絵はがき」が相次いで浮かびあがってくる。これらのどこかキッチュな媒体が、写真を社会化する媒介になったわけである」(351-352)

・ステレオスコープは1851年のロンドン万博にて広く大衆に広まることとなる。

・葉書の登場は1860年代から70年代、そこに写真や絵が付されるのは19世紀末。

・多木の研究によると、写真はがきに関わっていた人物のごく一部として、アジェ、ルートランジェー家、セベルジェ兄妹などが挙げられるという。

・「葉書には最初からコレクションとそれを利用した通信という二つの効用があった。コレクションは、珍しいイメージ、知りたいもの、未知な世界などを収集し、その収集がある意味での世界認識の外化になっていたのである。しかし通信は興味のある記号論的事実を見出させる。・・・一般的にいうと、絵はがきのもうひとつのメッセージは、同時代性を確かめ合うことを基調にするといってもよい。」(369-370)

